

“創造”人々

アジア医師連絡協議会AMDA(アムダ)

援助を受ける側にもプライドがある。

「開かれた相互扶助」こそ、国境や人種、宗教を越える鍵

語り手

AMDAグループ代表・医師

菅波 茂氏

人間の尊厳を守り合う
パートナーシップが原則

私たちAMDAは1984年の創設から今日まで、優に170を超える緊急人道支援活動に従事してきました。多くの発展途上国に行き、紛争や災害で生活の場を失った人たちに接してきた中で、私たちが学んだ一番大切なことは、「援助を受ける側にもプライドがある」ということです。

今は困窮した状況下であえいでいても、いつかは自分も社会から認められたい、社会の役に立ちたいという最小限の人間の尊厳を持つていたいということを決して忘れてはなりません。そして、それを互いに守り合う関係、つまりパートナーシップを作っていくことが、国境や人種、民族、文化、宗教の壁を越えていくための原理原則であり、心の扉をひらく鍵だと確信しています。AMDAが提唱している「開か

「救える命があれば、どこへでも」をモットーに災害や紛争等が発生した現地に駆けつけ、緊急人道支援活動を展開している多国籍医師団AMDA。その支援活動はこれまで優に170を超えている。国家の派遣チームが支援を断られる状況下にあっても、AMDAだけは現地の人々に歓迎されるのはなぜなのか。グループ代表の菅波茂氏にお聞きしてみました。



AMDAグループ代表・医師 菅波 茂氏
1946年広島県生まれ。72年岡山大学医学部卒業、77年同大学大学院修了。岡山大学在学中にアジア放浪の旅に出て、その多様性に魅了され、80年アジア医学生国際会議を組織。81年の菅波内科医院開業の傍ら、84年にアジア医師連絡協議会(AMDA=Association of Medical Doctors of Asia)を組織する。現在、AMDAグループ代表を務め、岡山に続く活動の新拠点となるマレーシアの首都クアラルンプールに在住。

れた相互扶助」とは、一方的に支援するスポンサーシップでもフレンドシップでもなく、パートナーシップ。互いを思い尊重し合う「人間同士の絆」がAMDAの活動を支えているのです。

**チャリティではなく、
労働を治療費の代償に**

例を挙げて説明しましょう。多くの発展途上国では、金銭を持たない貧しい人たちがたくさん病院に来ます。その人たちをどう受け入れるか

という時、二つの考え方ができます。一つは、お金がないのだからタダにしてあげようという考え方。もう一つは、タダにすること“が本当にいいのか”という考え方です。貧しい人にはタダにしてあげましょうと言うのがいわゆる従来からあるチャリティで、欧米のNGOが作ったチャリティホスピタルがそれにあたります。

私たちAMDAが選んだのはチャリティホスピタルではなく、お金がない人には労働を代償にする方法です。仮に父親が病気やケガの子どもを抱

えて、野を越え山を越えて来院し、入院になった場合、親も1週間くらいそこに滞在することになります。子どもの退院を待つ間、親に病院の仕事をいろいろ手伝ってもらうのです。もちろん、これで治療費を回収できるわけではありませんが、絶対タダにはしないということを基本にしています。そうすると、帰っていく時の父親の顔がとてもいい顔になります。

つまり、お金は要りませんと言うことは“あなたには支払う能力がない”と暗に伝えることと同じですが、働い

て代金を払いなさいということ
 “あなたにはその能力がある”という
 ことを認めたことになりました。困窮
 にあえぎながらも持っている人間の尊
 厳、援助を受ける側にもあるプライ
 ドを大切にすることが重要なのです。

**助けたいという思いだけでは、
 国境の壁は越えられない**

「援助を受ける側にもプライドがあ
 る」——その教訓に気づいたのは、
 AMDAの活動が始まったばかりの1
 991年、ミャンマー内紛で難民になり、
 バングラデシュに流入したイスラム教の
 ロヒンギャ族への救援活動に参加した
 時のことです。当時、
 バングラデシュ政府で
 は外国のNGOの受け
 入れ手続きに3カ月
 もかかっていたところ
 を、我々AMDAの救
 援医療チームは3日
 間で手続完了となり
 ました。しかも、マス
 コミをあげての大歓
 迎。なぜなのか？理
 由はただ一つ——我々の医療チームの団長
 が、日本に留学していたバングラデシュ
 出身の医師だったこと。それがバング
 ラデシュのプライドを守ることにつな
 がっていたわけです。



バングラデシュ ロヒンギャ難民への
 救援活動(1991年～)



「もし明日、私たちが困ったら
 助けに来てください」の一言を

そのことに気づいて以来、AMDA
 が海外に医療チームを派遣する際に必
 ず使うキーワードがあります。それ
 は、「今、あなたが困っているから助け
 に来ました。その代わり、もし明日、
 私たちが困ったら助けに来てくださ
 い」。この言が大切なのです。

私自身が強く印象に残ってい
 るのは、インドネシアでのこと
 です。2006年、インドネシ
 アのジャワ島の南部、古都ジョ
 グジャカルタで大地震が発生。
 この時、AMDA多国籍医師
 団を派遣。翌年
 に日本医師会の援
 助資金でヘルセン
 ターを再建。その
 開院式で私はこ
 う言いました。

「昨年はおなた方
 が困難に瀕してい
 たから助けに来



ジャワ島南部ジョグジャカルタ大地震の被災地への
 救援活動(2006年)

「今日まで多くの国内外の団体が支援
 してくれました。しかし、自分が困っ
 たときに助けに来てほしいと言ったの
 はドクター菅波が初めてだ。私は非常
 にうれしい」と。

**わかりやすい説明こそ、
 相互理解の突破口**

もう一つ、国際社会で活動する上で
 大切なことは「説明」です。どんな人
 道援助も受ける側がその理由を理解
 できなくてはいけません。説明の無い
 親切は相手に警戒感や不快感を与え
 てしまう。それが国際社会なのです。

阪神・淡路大震災発生から間もな
 い1995年5月、サハリンで大地震が
 ありました。この時、ロシア政府は日
 本政府からの救援隊は断りましたが、
 民間のAMDAは現地に受け入れられ
 ました。政府の救援隊が拒否された
 理由は、「日本は北方領土を取り返す

ました。今後、
 日本が阪神
 大震災のよ
 うな災害に
 襲われたら
 ぜひ助けて
 来てくださ
 い」。それに
 応じてジョグ

ための材料にするに違いはない。借りを
 作りたくない」と捉えられたことです。
 この時、AMDAは「阪神大震災で助け
 てくれたじゃないですか。今度は我々
 がお返しに来ました」と説明して理解
 されました。6月1日には被災地へ軍
 用ヘリコプターで入り、私達の搬入し
 た医薬品と一般救援物資は非常に喜ば
 れました。

相互扶助の精神は国境の壁を越え
 る行動原理であり、相手のプライド
 や立場を配慮した思いやりこそ、相互
 理解の突破口。政府のできないことも、
 民間のAMDAにはできるのです。

**医師を目指す君たちも
 AMDAの活動に参加しよう!**

海外研修プログラム「グローバル人財育成」

AMDAでは、意欲ある学生や医師を対象に、東南アジアや南西
 アジアの国々で約1週間、AMDAの活動に参加してもらう新しい海外
 研修プログラム「グローバル人財育成」を実施しています。

君たちも近い将来、ぜひAMDAに参加して様々な経験を積み、
 これからの国際社会で活躍できる医師へと羽ばたいてください。